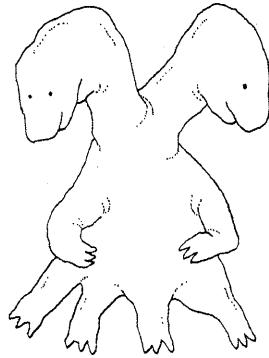


# ある日

## 保育の質について考える

津守 真



### かかわりの道

Y夫の母親は、いろいろの子どもたちに好かれる。子どもたちの中になると勉強になるからと、毎日のように保育に参加している。

ある朝、私はこの母親と一緒に保育をしながら、たくさんの子どもがあなたのことを好きなのは、あなたと子どものかかわりの質が良いからでしょうと話した。同じように子どもと遊んでいるように見えても、人によってかかわりの質が違う。子どもを抱えている

ときも、いつ降ろそうかと思って抱くときと、その時を子どもと親しくなるチャンスと  
思って抱くときとは、かかわりの質はまるで違う。それに加えて、ことばのかけ方、材  
料の選択など具体的なこともある。Y夫は、母親と話している私の手を持ち上げるように  
引っ張った。この子はタンバリンや鈴を鳴らしながら行列をしようと云っているのだと  
思った。その通りで、しばらく歌を歌いながら、太鼓を叩いて行列して歩いた。ひとしき  
りすると自分で終わり、二階のベランダに出た。滑り台の上に行くが、慎重でなかなか滑  
らない。私が先に滑ると、スリッパを滑らせ、手で押していた人形の乳母車を滑らせ、そ  
の後で自分がそろそろと滑って来た。足にはいていたスリッパ、手に持っていた乳母車は  
いずれも自分の分身である。Y夫が自分で滑り台を滑ったのはこの日をはじめである。  
先日、保育の後のミーティングのときに、私も母親も他の子どもから誘われると、Y夫を  
おいて立ち去ることが多いことを指摘されていたので、この日、私は、Y夫の傍らを離れ  
ないようにしようと心を決めていた。そのことが、この日のY夫がはじめて滑り台を滑る  
のを力づけたのだろう。

### 能動性を養う

午後になって、私は、K子に抱っこをせがまれた。午前中もだれかに抱かれていたし、  
いつもよりも特別に大人に抱かれて過ごすことが多かった。私は疲れを覚えながら階段を  
上っていると、K子は「すこし、へん」と言う。私ははっと気が付いた。小さな発作の前

兆のようだ。この子は身体内部の変調をこうして表現するようになっていたのだった。こんなことが二度あった。階段を降りながら、「眠くなった」と言つて私の肩に頭を伏せた。校長室のソファで横になると、一瞬眠つた。身体内部の異変を察知したとき、大人にそれを訴え、自分でその時を過ごし易くしようとする子ども自身の意識的努力に私はたまたまや感心させられた。発作のような身体の中できこえることは、人の意志のコントロールの外のことと考えられており、そうに違いないが、受け身になるより他ないことをも、この子は能動的に統御することを学んでいる。そのような能動性を養うことにこそ、日常の教育の重要さがある。K子は一瞬の後目覚めるとすぐに、夕焼け小焼けの赤トンボの歌を三番まで私に歌わせ、私はその歌詞の最後が分からなくて苦労した。

### 就学相談

この日、普通の幼稚園に通っているH子が就学相談のために母親につれられて来た。ひと月前に来て、二回目である。私を見るとすぐに手をつないだ。先回来たとき焼き芋を庭で焼いていて、それを食べたのが印象的だったようで、翌日幼稚園から芋掘りに行ったときにもらった三本のうち二本は食べて、一本は私にもつて行くと言つて取つておいたら腐ってしまったとのことで、またお芋が食べたいという。

庭で、養護学校の子どもの三歳と四歳の妹たちが遊んでいて、H子は一緒に遊びに加わった。三人の間に取り合いが始まり、私は間に入ろうとしたが見ているとその必要はな

く、次第に追いかけてこになり、子どもたちの間で解決してしまった。そこに焼き芋ができてきた。それをまた三人で取り合いながら食べる。私がひとつくたさいと言うと、「メダモンネー」と三人で声をそろえて顔を見合わせる。こうして長い間やりとりしながら遊んだ。

前回も今回もH子は絵をかいた。前回の絵は、丁寧クレヨンを前後に動かしながら、きれいな円を描いた。中央が空っぽなので、私には自分自身の中身がないのだろうかと思ひ、その絵をとっておいた。今回も時間をかけて丁寧に円を描いたが、その中に、目と鼻と口を描き、円の外に天と地の線を描いた。このひと月の間に、この子は実質的な成長をとげている。

H子は、教育委員会で養護学校または心障学級に行くように指導を受けている。そのことに母親は疑問を持って相談に来たのである。この子は幼稚園でもよく遊んでいるし、こうして見ていると、少人数の子どもとゆっくりと遊べる場を作れば、子どもたちと一緒に学んでゆくことができることが分かる。小学校に入學するときに、どうしてもたちと一緒にちから分離せねばならないのか。幼稚園の先生や母親の疑問は当然である。私は世界のあちこちで見て来たことを思い起こした。旧ソ連下のチェコの幼稚園ですら、子どもによって就学を一年、二年延ばすのは当然と考えていた。日本の行政指導の実情を話してもその意味がむしろ通じないほどであった。子どもの実情をよく見ている人が就学の判断するのは当たり前ではないか。専門家が最も良く知っているから、判断は専門家に委ねるとい

うのでは、シンガポールの O M E P セミナーでホッホマン女史が強調していた、現代は専門家の位置がコペルニクスの転回をしたという世界の風潮と逆である。「中心にいるのは、子どもと家族であって、専門家はそれを周縁で支援する人である。」(幼児の教育 一九九四年十一月)。

更に、学校の側を見ても日本の小学校教育では一斉指導しか念頭にない。インドの小学校ですら、算数の授業で、三人、五人と少人数で、子どもたちは、床や廊下で頭を突き合わせて勉強していた。教壇に向かう机の前に座ることを強調するのは、日々の子どものかわりの質を尊重しない考え方ではないか。

私は、いま、O M E P 世界大会を目前にして、その準備のために何かをしない日はない。保育の場にあっても、その限られた空間と時間の中できこことが、世界とどういうふうにかかわるのかを考える。九年前のエルサレムの世界大会のテーマが「保育の質」であった。世界中の保育者が保育の質を良くすることで苦心している。私共の保育の一日の小さな努力は、世界中の保育者に共通の課題である。

(愛育養護学校)